

- 村井順『建礼門院右京大夫集評解』（有精堂 一九八八）
- 糸賀きみ江校注『建礼門院右京大夫集』（新潮社 一九八七）
- 草部了円『世尊寺伊行女 右京大夫集』（笠間書院 一九七八）
- 今井卓爾監修『建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』
（勉誠社 一九九〇）
- 柳田征司編『論集 日本語研究 中世語』（有精堂 一九八〇）
- 昭和美術館蔵 彰考館所蔵本影印複製
- 内閣文庫所蔵本影印複製
- 書陵部所蔵本影印複製
- 神宮文庫所蔵本影印複製
- 岡山大学図書館所蔵本影印複製
- 北海学園大学所蔵本影印複製
- 群馬大学図書館所蔵本影印複製

〔平成十二年十一月三十日 受理〕

蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は、「いれてうへに」であり寛永刊本は「いれて上に」である。

「おきて」の「お」に、一点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。

『下官集』「草木をうへをく」があり、定家仮名遣いの实例にも多数「をく」が見られるので、定家仮名遣いを抛りどころに書き入れたと考えられる。

今山本の書き入れ「はなたのうすやうに書て」は、「は」に、二点のミセケチ、他の「な」から「て」には一点のミセケチがある。

今山本の書き入れと同じ「はなたのうすやうにかきて」は、彰考館所蔵本のみ、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は「それにはなたのうすやうにかきて」と「それに」が加わっている。

おわりに

国文学演習の資料として作成したものを手直しして、すべて掲載し、各方面からご教示いただいたこうと思つてスタートしたが、二〇ウ（歌番号七六 詞書）までしか掲載できなかった。

今回のミセケチ（写本などで、字句の訂正をするのに、もとの文字が読めるようにした消し方で、その文字に傍点または細い線などをしるすこと）にかかわることで顕著な点を挙げる。

- 1 ミセケチが施されている箇所六三のうち今山八幡宮所蔵本と九州大学図書館所蔵本の翻刻が一致した箇所、五二である。
- 2 仮名の書き入れ五五のうち藤原の定家仮名遣いとかかわりがあるとと思われるもの二九である。仮名の書き入れで抛り所の見当た

らないものがある。

- 3 五九の詞書で「をふね」（書き入れ「舟」と書写された直後の六〇の歌では「おふね」と書写され、「を」の書き入れがある。書き入れに複数の人物が考えられる。

主な使用文献

- 宮崎女子短期大学紀要第十六号抜刷（宮崎女子短期大学 一九九〇）
- 井狩正司編著『建禮門院右京大夫集 校本及び総索引』（笠間書院 一九九七）
- 大野晋『仮名遣と上代語』（岩波書店 一九八二）
- 福井久蔵編輯 国語学大系（仮名遣二）第六卷（国書刊行会 一九八一）
- 渡辺真理子「学生レポート―今山神社蔵『建礼門院右京大夫集』について（『解釈』二〇二号 一九七二）
- 福島直恭「定家仮名遣の社会的意義」（『国語学』一六六 武蔵野書院 一九九一）
- 中田祝夫編『古語大辞典』（小学館 一九八三）
- 久松潜一 松田武夫 關根慶子 青木生子『平安鎌倉私家集』（岩波書店 一九六七）
- 久保田淳校注・訳『建礼門院右京大夫集 とはすがたり』（小学館 一九九九）
- 本井田重美評註『建礼門院右京大夫集』（武蔵野書院 一九八八）
- 久曾神昇『昭和美術館蔵伝津守国夏筆 建礼門院右京大夫集と研究』（ひたく書房 一九八二）

「をとつる、にも」である。

定家仮名遣いの実例を見ると、高松宮本古今和歌集「をとつれ」四例、高松宮本後撰和歌集「をとつれ」七例、高松宮本拾遺和歌集「をとつれ」四例、伊勢物語（天福二年本、定家筆）「をとつれ」三例、御物本更級日記「をとつれ」二例、前田家本定頼集（定家自筆本）「をとつる」二例があり、書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。『仮名文字遣』に「をとつれ 音信 音」がある。

一九ウ

○まよふへきやみもやかねて晴ぬらんかきおくもの法のひかりに（六九 歌）

「お」に二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。

九州大学図書館所蔵本も今山本と同じ「おくもの」である。

宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所集本、彰考館所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、群書類従所収本、架蔵甲本は、今山本の書き入れと同じ「をく」である。

二二の歌「と、めおきて」の用例で述べた通り、『下官集』に「草木をうへをく」があり、さらに、定家の仮名遣い実例にも多数実例が見られるので、書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

○内の御方の女坊宮の御方女坊車のあまたにて近しゆの上達部殿上人くしてあわれしになやむことありて（七〇 詞書）

「坊」に、二点のミセケチをそれぞれ施し、「房」を書き入れている。

九州大学図書館所蔵本も「女坊」である。

宮内庁書陵部所蔵本、内閣文庫所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収

本は、書き入れと同じ「女房」、吉水神社所蔵本は「女はう」である。

「女房」は、平安時代から用いられている。「坊」は誤写とみて書き入れたと思われる。

「あわれ」の「わ」に、二点のミセケチを施し、「は」を書き入れている。

九州大学図書館所蔵本の翻刻は、「あはれ」で今山本の本文と一致しない。書き入れと一致。

『下官集』に「あはれひ み」、『仮名文字遣』に「あはれむ 憐

愍 矜」がある。七八の詞書「あわれにて」、一一五の詞書「あわれなれとて」、一九二の詞書「あわれにも」、二二〇の詞書「あわれにと」、三三四の詞書「あわれなれは」と、六例すべて詞書にあり、そして、「は」の書き入れがある。

二〇オ

○とかく物おもはせし人の殿上人なりしころち、おと、の御ともにすみよしにまうて、かへりてすはまのかたむすひたるかひともしろく／＼にいれてわすれ草をおきてむすひつけられたりし（七六 詞書）

今山本と九州大学図書館所蔵本の詞書は一致している。

今山本の「いれて」の「いれ」に、たてに棒状の線が施してある。

そして、「いれて」と「わすれ草」の間に、「うへに」を挿入するような感じの書き入れが見られる。しかし書き入れの「う」「に」に、二点のミセケチ「へ」に、一点のミセケチが施されているので、書き入れた人、書き入れにミセケチを施した人等、複数の人物が関わっているようである。

彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本、天理図書館所

陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本は「おはな」である。内閣文庫所蔵本は「お花」、群書類従所収本は「尾花」である。

『下官集』に「おはな」がある。藤原定家の仮名遣い实例を見ると、高松宮本古今和歌集「於はな（尾花）」二例、高松宮本後撰和歌集「於はな（尾花）」四例がある。『仮名文字遣』に「おはな 小花尾花」がある。

「お」の書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

「いたしつ、」の「つ」の右横に「て」を書き入れている。九州大学図書館所蔵本も「いたしつ、」である。二本だけである。

宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は「いたして」、内閣文庫所蔵本は「わたしで」である。

用例の箇所は、詞書の部分であるから「いたして」が自然である。○露のおくおはな袖をなかわれはたくふなみたそやかてこほる、

(六三 歌)

「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。

九州大学図書館所蔵本も今山本と同じ「おく」であるが、宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、内閣文庫所蔵本は、書き入れと同じ「をく」である。

「契おきし」(三三 歌)で述べた通り、『下官集』と定家仮名遣い实例に多数の用例が見られるので、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

○物おもへなけくとなれるなかめかなたのめぬ秋のゆふくれの空
(六四 歌)

「く」の右横に「こイ」の書き入れが見られる。九州大学図書館所蔵本も同じ「なけく」であるが、『建禮門院右京大夫集 校本及び總索引』の頭注に「彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本『なけく』の如く見ゆれども一往『く』を『く』とよむ」とある。

宮内庁書陵部所蔵本は「なけこと」、内閣文庫所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、群書類従所収本は「なけく」、架蔵甲本は「なけけ」と写本異同が多い。

今山本の書き入れと同じ「なけこ」の写本は見当たらない。この表記の祖本があつたと思われる。

一九才

○かけはなれいくはあなちにつらきかきりにそもあらねと(六七

詞書)

書き入れ「へ」に、二点のミセケチが見られる。書き入れのミセケチは珍しい。

九州大学図書館所蔵本も「かけはなれいくは」で、今山本と一致している。

ミセケチの書き入れと同じ「いへは」の写本は、宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、群書類従所収本、架蔵甲本である。

一九才

○いつしか春のけしきもうらやましう鶯のおとつる、にも(六七
詞書)

「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。

九州大学図書館所蔵本も今山本と同じ「おとつる、にも」である。宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、群書類従所収本、架蔵甲本は、書き入れと同じ

であるの意。上代は『おと』のみで、中古から『おとうと』が用いられるようになった。兄に対する弟、姉に対する妹を、それぞれ『おとうと』といったが、近世から男に限られるようになった」とあり、今山本の書き入れ「を」の拠り所は見当たらない。

「いきおい」に関する藤原定家の仮名遣い实例を見ると、高松宮本古今和歌集「いき於ひ」二例、御物本更級日記（定家自筆本）「いき於ひ」一例がある。

行阿の『仮名文字遣』に「いきほひ 勢 威」、『和字正濫鈔』巻二に「いきほひ 勢」があり、今山本の書き入れと同じである。

一六才

○宮は御手くるまにて行啓^啓あるへしと聞えし（五八 詞書）

「啓」に、二点のミセケチを鮮明に施し、「啓」を書き入れている。初学者などを考慮し、確認のつもりで書き入れたと思われる。

今山本も九州大学図書館所蔵本も「行啓あるべし」である。

一六ウ

○くしをこひ聞えたりしをたふとて紅のうすやうにあしわけを^舟ふむすひたるくしさしたるかなの○ならぬにかきてをしつけられたりし（五九 詞書）

「あしわけをふね」の「ふね」の右横に「舟」を書き入れている。

九州大学図書館所蔵本も「あしわけをふね」である。

無窮会神習文庫所蔵本は「あしわけを舟」、吉水神社所蔵本は「あしわけをふね」、内閣文庫所蔵本は「あしわけ小船の」、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は「あしわけをふね」である。

五九、○の詞書の「なの」と「ならぬ」の間に○が記入され、この横に「め」が書き入れられている。「なのめならぬに」は、「たい

そうりつばな櫛に」の意で、「め」の脱字と判断して書き入れたと考えられる。

○あしわけて心よせけるおふねともくれなゐふかきいろにてそしる（六〇 歌）

「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。

宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本は「をふね」、内閣文庫所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は「小船」である。

今山本は、五九の詞書と歌は「をふね」と表記し、六〇の歌は「おふね」と書写し、「お」の右横に「を」を書き入れている。

また、五九の詞書「をふね」の「ふね」の右横に漢字「舟」の書き入れがあり、統一されていない。

このことから、書写と書き入れの段階で複数の人物が関わっていると思われる。

「をふね」に関する藤原定家の仮名遣い实例を見ると、高松宮本古今和歌集「を舟」二例、高松宮本後撰和歌集「を舟」一例、高松宮本拾遺和歌集「を舟」三例、伊勢物語（天福二年本、定家筆）「を舟」一例である。

行阿の『仮名文字遣』に「をふね 艇 小舟」がある。

「を」の書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

一八才

○つねよりもおもふ事ある比をはなか袖の露けきをなかめいたしつ、（六三 詞書）

「を」に、二点のミセケチを施し、「お」を書き入れている。

九州大学図書館所蔵本と同じ「をはなか袖」であるが、宮内庁書

系統の写本を見て行った可能性が高い。

『仮名文字遣』は「を」は 伯母 内戚 姨母 姨、歴史的仮名遣いも「をばすてやま」である。

一四才

○春の花秋の月にもおとらぬはみやまの里の雪のあけほの(五一歌)

「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を右横に書き入れている。

今山本も九州大学図書館所蔵本も「おとらぬは」で一致している。無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は、書き入れの「をとらぬは」である。寛永刊本は「おとらねば」で文脈のつながりに難がある。

藤原定家の仮名遣い实例を見ると、高松宮本古今和歌集「於とら(劣)」三例、高松宮本後撰和歌集「於とら(劣)」四例、「於とり」一例、高松宮本拾遺和歌集「於とら(劣)」四例、御物本更級日記(定家自筆本)「於とる(劣)」三例、前田家本定頼集(定家自筆本)「於とら(劣)」一例、近代秀歌(定家自筆本)「於とり(劣)」一例とあり、今山本の「おとら」は、定家仮名遣い、歴史的仮名遣いと一致している。

なお、行阿の『仮名文字遣』に、「をとる踊躍(マ、)勝劣(マ、)」があり、今山本の書き入れと一致する。
を おとら

一四ウ

○山里の花をそけなるこすゑよりまたぬあらしのおとそ物うき(五三歌)

「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。

今山本も九州大学図書館所蔵本も「おとそ」である。

宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本は、書き入れと同じ「をと」である。

九ウの「うつおとにねさめの袖そ」(二二五)で、述べた通り、『下官集』に「風のをと」があり、また、定家仮名遣い实例も多数見られるので書き入れは、定家仮名遣いである。

一五才

○をなしおと、の大臣の大将にてよろこひ申し給しにおとうとの右大将御ともし給へりしいきおいゆ、しくみえしかは(五七 詞書)

「をなし」「おとうと」「いきおい」は、九州大学図書館所蔵本と同じである。このことから写本として同系統の可能性が高い。「をなし」「おとうと」「いきおい」は、いずれも二点のミセケチが施され、「をなし」の「を」に「お」の書き入れ、「おとうと」の「お」に「を」の書き入れ、「いきおい」の「おい」に「ほひ」の書き入れが見られる。

「をなし」については、三ウ(六の詞書)に述べた通り、『下官集』に「おなし事」があり、また、定家仮名遣い实例も多数見られるので、書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

「おとうと」について、藤原定家の仮名遣い实例を見ると、高松宮本古今和歌集「於とうと」一例、前田家本定頼集(定家自筆本)「御(於)とうと」一例が見られる。

行阿の『仮名文字遣』にも「をと、おと、ひの時はお也 おと」との時もお也 弟」とある。

歴史的仮名遣いも、「おとうと」であり、『古語大辞典』(小学館)の語誌に「『おと』は『おと(劣)る』の『おと』と同根、年が下

思われる。行阿の『仮名文字遣』に「をか丘 岡陵 岐」があり、歴史的仮名遣いも「をか」である。今山本「おか」の拠り所は見当たらない。

○我やとのやえやまふきのゆふはへにゐてのわたりもみるこ、ちして（四〇 歌）

「え」に、三点のミセケチを施して、「え」の右横に「へ」を書き入れている。今山本も九州大学図書館所蔵本も「やえやまふき」である。宮内庁書陵部所蔵本は「八え」、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は「やへ」、内閣文庫所蔵本は「八重」である。『下官集』に「やへさくら」がある。書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。『下官集』に「こ、のへのうち」がある。

『仮名文字遣』に「やへさくら 八重櫻」「やへむくら 八重葎」とあるが、今山本の「やえ」表記の拠り所は見当たらない。

一二ウ

○いかりおろすなみまにしつむ入ひこそくれゆく春のすかたなりけれ（四一 歌）

内閣文庫所蔵本のみ漢字書きで「暮行秋」となっている。今山本も九州大学図書館所蔵本も「入ひこそくれゆく春」と一致している。

本文の「く」に二点のミセケチを施し、「く」を書き入れている。初学者など、読む人のことを考慮して書き入れたと思われる。

○むらさきのちりはかりしておのつからとところ／＼にもゆるさわらひ（四三 歌）

「おのつから」の「お」に、二点のミセケチを施して、「を」を書き入れている。

今山本も九州大学図書館所蔵本も「おのつから」と一致しているが、宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、寛永刊本、架蔵甲本、群書類従所収本の諸本は、書き入れと同じ「をのつから」である。

藤原定家仮名遣い実例を見ると、御物本更級日記（定家自筆本）「をのつから」三例、前田家本定頼集（定家自筆本）「をのつから」

一例、近代秀歌（定家自筆本）「をのつから」一例があり、書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

一三ウ

○すきてゆく人はつらしな花す、きまねくまそてに雨はふりきて（四八 歌）

「く」に、二点のミセケチを施して、右横に「く」を書き入れている。一二ウの「いかりおろすなみまにしつむ入ひこそくれゆく」の「く」と同じ書き入れである。

一三ウ

○名にたかきおはすてやまのかひなれや月のひかりのことにみゆらん（四九 歌）

「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。

今山本も九州大学図書館所蔵本も「おはすてやま」と一致している。

宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本は、書き入れと同じ「をはすて」である。架蔵甲本と群書類従所収本のみ漢字の「嬢捨山」である。

藤原定家の仮名遣い実例を見ると、高松宮本古今和歌集「をばすて」一例、高松宮本後撰和歌集「をばすて」二例、御物本更級日記（定家自筆本）「をばすて」一例があり、書き入れは、定家仮名遣い

一一才

○契おきしほとはちかくなりぬらんしつれにけりなあさかほの花

(三三) 歌)

「お」に、三点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。

「契おきし」の箇所は、今山本と九州大学図書館所蔵本は一致している。

宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本は「ちきりをきし」、無窮会神習文庫所蔵本、吉水神社所蔵本は「契をきし」、内閣文庫所蔵本は「契り置し」、寛永刊本は「契りをきし」と写本異同がある。

九才「と、めおき」で述べた通り、書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

○ふくるよのねさめさひしき袖のうへおをとにもぬらす春の雨哉
(三三) 歌)

「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。今山本も九州大学図書館所蔵本も「おにも」である。

宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本は、書き入れと同じ「をと」、内閣文庫所蔵本、群書類従所収本は「音」である。

九ウ「うつおと」で述べた通り、書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

一一ウ

○山里はかとおたのなはしろにやかてかけひのみつまかせつ、
(三七) 歌)

「お」に、二点のミセケチを丁寧に施して「を」を書き入れている。今山本も九州大学図書館所蔵本も「おたの」である。

無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、寛永刊

本、天理図書館所蔵本は、書き入れと同じ「をたの」である。内閣文庫所蔵本のみ「小田の」である。

『下官集』に「を山田」がある。藤原定家の仮名遣い实例に、高松宮本拾遺和歌集「を山田」がある。「をだ(小田)」の「小」は、接頭語で、「小さい田、田」の意である。

「湯種蒔荒木之小田矣求跡足結出所沾此水之湍尔 湯種蒔く荒木の小田を求めむと足結出で濡れぬこの川の瀬に」(『万葉集』巻第七 一一〇)の「小田」は「田」の意。

行阿の『仮名文字遣』に「をやまた 小山田」がある。歴史的かな遣いも「をやまだ」であり、「おた」の拠り所は見当たらない。

一一才

○おほつかな、らひのおかののみしてひとりすみれの花そつゆけ
き(三九) 歌)

「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。今山本も九州大学図書館所蔵本も「おかの」である。

宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本は、書き入れと同じ「をかの」、吉水神社所蔵本、寛永刊本は、「をかは」、内閣文庫本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は「岡は」である。

『下官集』に「をかのへ」がある。藤原定家仮名遣い实例を見ると、高松宮本古今和歌集「をか(丘)」一例、「をかべ」一例、「かたをか」一例、「むねをか」二例、高松宮本後撰和歌集「をか(丘)」二例、高松宮本拾遺和歌集「をか(丘)」七例、御物本更級日記(定家自筆本)「をか(丘)」四例、前田家本定頼集(定家自筆本)「をか(丘)」五例、近代秀歌(定家自筆本)「をか(丘辺)」二例があり、書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと

と(音)二例、御物本更級日記(定家自筆本)「をと(音)」一九例、前田家本定頼集(定家自筆本)「をと(音)」二例である。書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。一〇才

○野亭夕の草(二七 詞書)

本文「草」の上部に一点のミセケチを施し「の」と「草」の間に「夏」を書き入れているようである。「草」の訂正より、他の写本を見て、挿入のつもりで「夏」を書き入れたと思われる。

この詞書の意味は、歌から「野の中にあずまやから見た夕方の夏草」と考えられる。

詞書は今山本も九州大学図書館所蔵本も「夕の草」であるが、宮内庁書陵部所蔵本は「夕草」、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本は「夕夏草」、天理図書館所蔵本、群書類従所収本は「夕の夏草」、架蔵甲本は「夕の夏くさ」と、五通り見られる。

○連夜のくいな(二八 詞書)

「い」に、二点のミセケチを鮮明に施し、「ゐ」と書き入れている。今山本も九州大学図書館所蔵本も「くいな」であるが、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本の諸本は「くるな」と表記している。

『仮名文字遣』に「くるな 水鶏 龜鳥」、『和字正濫鈔』卷二に「水鶏 くひな」、『日本書紀』(卷二十四皇極天皇)の注に「水鶏、此云俱比那」とある。

○あれはて、さすこともなきまきのとをなにとよかれすた、くくひなぞ(二八 歌)

「ひ」に、二点のミセケチを施し、「ゐ」を書き入れている。詞

書では「い」にミセケチを施し、歌の箇所では「ひ」のミセケチを施しているので、「くるな」が正しい表記と見たと思われる。

今山本も九州大学図書館所蔵本も「くひな」である。詞書も歌の箇所も同じ表記であるから同じ系統の写本の可能性が高い。

宮内庁書陵部所蔵本は「くいなぞ」、彰考館所蔵本は「ゐなぞ」、吉水神社所蔵本、寛永刊本、群書類従所収本の三本は「くひなぞ」、内閣文庫所蔵本は「水鶏」で、「くひな」の写本はない。

一〇才

○たのめおきしこよひはいかにまたれましところたかへのふみさざりせば(二九 歌)

「お」に、二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。

「たのめおきし」は、今山本も九州大学図書館所蔵本も同じである。

宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、吉水神社所蔵本、寛永刊本は、書き入れと同じ「たのめをきし」、内閣文庫所蔵本は「頼め置し」である。

九才「と、めおき」で述べた通り、書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

一〇ウ

○まろねしてかへるあしたのしめの中に心をそむるうくひすのこゑ(三〇 歌)

「そ」の右横にミセケチなしで「と」を書き入れている。

今山本も九州大学図書館所蔵本も「そむる」で一致している。

吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本、寛永刊本は、書き入れと同じ「とむる」である。

の北の山までをくる。男の行をみてかなしみたてり。男歸らずなりぬ。女その子を負て立ながら死ぬるに、化して石となれり」とある。この「望夫石」のことは、『幽明録』『八雲御抄』『十訓抄』『和歌色葉上』『和歌童蒙抄』『歌林拾葉集』『唐物語』等にも同じ内容で記載されていて、有名だったことがわかる。「化して石となれり」「化立為石」等から、原本は「いはと」だったと思われる。

○おきつなみいはうつひそのあわひかひひろひわひぬる名こそおしけれ(二〇 歌)

九州大学所蔵本と今山本の書き入れは同じ「あはひかひ」である。宮内庁書陵部所蔵本は「あはひかは」、吉水神社所蔵本、寛永刊本は「あはひかい」、内閣文庫所蔵本は「あはひ貝」である。

「いわせ」「あわひかひ」ともに、「わ」の右横に「は」の書き入れがある。これは、行阿の『仮名文字遣』と一致する。

九ウ

○夕にすへる野の花(二二 詞書)

本文「へる」の文字にそれぞれ一点ずつミセケチを施し、「くる」を書き入れている。今山本の書き入れは、九州大学図書館所蔵本と一致している。

「夕にすへる野の花」は、詞書で「夕方に尾花の咲いている野を通り過ぎる」の意である。歌は「心をはおはななそてにと、めおきてこまにまかする野辺のゆうくれ」であり、夕暮れの野を駒の歩みにまかせて通る状況を三十一文字にまとめたものである。詞書、歌の内容から「すへる」は、誤写と思われる。

○おはななそてにと、めおきて(二二 歌)

本文「お」に二点のミセケチを施し、「を」を書き入れている。

今山本も九州大学図書館所蔵本も「おきて」であるが、宮内庁書

陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は「をきて」である。

『下官集』に、「をく露」「草木をうへをく」「うへにをく」がある。

藤原定家仮名遣い实例を見ると、高松宮本古今和歌集「をき」一三例、「をか」二例、「をく(置く)」一三例、「をけ」六例、高松宮本後撰和歌集「をく」一九例、「をか」八例、「をき」二二例、「をけ」一一例、高松宮本拾遺和歌集「をく(置く)」六例、「をか」四例、「をき」二〇例、「をけ」五例、伊勢物語(天福二年本、定家筆)「をく(置)」三例、「をき」五例、御物本更級日記(定家自筆本)「をく(置)」六例、前田家本定頼集(定家自筆本)「をく(置)」一四例、「をき」四例、「をけ」一例とあるので、書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

九ウ

○うつおとにねさめの袖そぬれまさるころもはなにのゆへとしらねと(二五 歌)

本文「お」に、二点のミセケチを鮮明に施し、「を」を書き入れている。

今山本も九州大学図書館所蔵本も「おと」であるが、宮内庁書陵部所蔵本、吉水神社所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は、書き入れと同じ「をと」である。

『下官集』に「風のをと」がある。

藤原定家仮名遣い实例を見ると、高松宮本古今和歌集「をと(音)」一八例、高松宮本後撰和歌集「をと(音)」三〇例、高松宮本拾遺和歌集「をと(音)」二〇例、伊勢物語(天福二年本、定家筆)「を

四例、「於しから」三例、「於しき」二例、「於しく」三例、「於しげ」一例、「於しけれ」二例、「於しむ」四例、「於しみ」三例、「於しめ」一例、「を、しま(を惜しま)」一例、「を、しみ(を惜しみ)」三例、高松宮本後撰和歌集「於しま(惜)」一例、「於しみ」三例、「於しめ」一例、高松宮本拾遺和歌集「於し(惜)」三例、「於しから」五例、「於しき」三例、「於しく」二例、「於しけく」一例、「於しけれ」一例、「於しむ(惜)」五例、「於しま」一例、「於しみ」五例、伊勢物語(天福二年本、定家筆)「於しま(惜)」一例、「於しみ」一例、「於しめ」一例、御物本更級日記(定家自筆本)「於し(惜)」二例、「於しむ」一例、「くち於し」四例、前田家本定頼集(定家自筆本)「於しむ(惜)」一例「於しむ」一例、「くち於しけれ」一例が見られるので、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

六才

○白河との、女はうたちさそひて(九 詞書)

本文「はう」にミセケチが一点ずつ施され「はう」の右横に「房」の書き入れがある。九州大学図書館所蔵本と今山本は、ともに「女はう」であるが、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本は、「女はら」である。「はう」の右横に「房」の漢字を書き入れたのは、「女房」の意の確認のためと思われる。ここは、「基通が、隆房・重衡・資盛などの、殿上人だった人々をお引き連れになり、母の白河殿に仕えている女房たちを誘って」という意の箇所である。

○又の比花の枝のなへてならぬ花(九 詞書)

本文の「比」にミセケチの二点が施され、「比」の右横に「日」が書き入れてある。

用例は、「その翌日、花の枝のたいそう美しいのを『花見に行っただ人々の中から』といって、中宮の方へよこされた」と続く箇所

「比」を「ころ」と読むことを懸念して「日」を書き入れたと思われる。

八才

○いつしかとけゆくみかは水ゆく(歌 一四)

本文「く」に、二点のミセケチが施され、その右横に書き入れの「く」が見られる。読み違えのないように書き入れたと思われる。

八才

○いつしかとこほりとけゆくみかは水ゆくすゑとをさけさのはつはな(一四 歌)

本文「な」の右横に「るイ」の書き入れがある。九州大学図書館所蔵本と今山本は「はつはな」だが、吉水神社所蔵本と寛永刊本は、「はつはる」、内閣文庫所蔵本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は「初春」である。

一首の意は早くもみかわ水の氷が解けてゆく。末永い春の第一日の立春であることだの意と思われる。「はつはる」体言止めで、余韻・余情を残し、詠嘆の心情を表現している。

八ウ

○あはれしりてたれかたつねんつれもなき人をこひわひいわせなるとも(一八 歌)

本文「わ」に、二点のミセケチを施し、「は」を書き入れている。九州大学図書館所蔵本と今山本は「いわせ」であるが、無窮会神習文庫所蔵本は、書き入れと同じ「いはせ」である。宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本、寛永刊本、群書類従所収本は「いはと」である。

『古今著聞集』(巻第五 一七九)に、「昔夫婦あひ思て住けり。男いくさにしたがひて遠くゆくに、其妻をさなき子をぐして、武昌

用例箇所は、歌「よのつねの松風ならはいかはかり」の下の句の部分で、「興のつきないあなたの調べに合奏もいたしましょうが」の意である。「しらつに」では、意味が通じない。誤って転写したと判断してミセケチを施し、書き入れたと思われる。

○をなし人の四月みあれの比（六 詞書）

「を」に二点のミセケチがあり、「を」の右横に「お」の書き入れがある。宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は、書き入れと同じ「おなし人の」である。

『下官集』に「おなし事」がある。さらに藤原定家仮名遣い実例を見ると、高松宮本古今和歌集「於なし（同）」一二例、「於なしく」一例、高松宮本後撰和歌集「於なし（同）」三〇例、「於なしく」五例、高松宮本拾遺和歌集「於なし（同）」一四例、「於なしく」一例、「於なしき」一例、伊勢物語（天福二年本、定家筆）「於なし（同）」一例、御物本更級日記（定家自筆本）「於なし（同）」八例、前田家本定頼集（定家自筆本）「於なし（同）」一〇例、近代秀歌（定家自筆本）「於なし（同）」三例が見られるので、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

○物かたりせしをり権亮これもり（六 詞書）

本文の「を」に二点のミセケチを鮮明に施し、右横に「お」を書き入れている。

三ウの「すきにしあるをりふみのやうにて」の「をり（折）」の「お」と同じ定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。「同じ実宗が、四月、賀茂祭のころ、藤壺へ来て話をしていた時、権亮維盛が通って行ったのを、呼びとめて」の意の箇所である。

○よひと〇めてこのほとに（六 詞書）

「と」と「め」の間に○を施し、○の右横に「と」を書き入れている。

無窮会神習文庫所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は、書き入れと同じ「よひと、めて」である。

「よひとめて」と「よひと、めて」は、意味の上では、あまり変わりはないが、書き入れから使用した写本の検討ができる。

○た、れたりしふたみのいろこき（六 詞書）

本文「み」に、二点のミセケチがあり、すぐ横に「え」の書き入れが見られ、「え」の下に墨筆の連う「へ」が書き入れてある。このことから書き入れの作業に複数の人が関わっていると考えられる。九州大学図書館所蔵本は、「ふたえ」、宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本は「ふたへ」、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本は「ふたあひ」、群書類従所収本は「ふたあゐ」と異同が多い。「ふたみ」は、今山本のみである。

意味は、「維盛は立っていらっしやった。（維盛は）ふたえ織りの紫色の濃い直衣と指貫、若楓の衣服」と続く描写の箇所である。

四ウ

○いかに命もをしくて（六 詞書）

本文の「を」に、二点のミセケチを施し、「を」の右横に「お」を書き入れている。

九州大学図書館所蔵本と今山本は「をしく」、宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、内閣文庫所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は、書き入れと同じ「おしく」である。『下官集』に「おしむ」がある。

藤原定家仮名遣い実例を見ると、高松宮本古今和歌集「於し（惜）」

る。

○わかくもおは○す宮はつほめるこうはいの(三 詞書)

「おは」のすぐ下に○があり、右横に「しまイ」の書き入れがある。

「わかくもおは○す」は、三十三歳の建春門院は、当時としては、すでに盛りを過ぎた年齢であるけれども、若くお見えであった」という意の箇所である。宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は「おはします」、無窮会神習文庫所蔵本は「おはす」で、今山本の欠字「おは○す」にちかい表記は細川家本九州大学図書館所蔵本は「おいます」で、四通りの表記が見られる。今山本は、二オでは「をはしまし」と転写され、二ウでは「おは○す」となっている。「於はします」は、二オで述べた通り、定家仮名遣いの表記である。

○みなさくらをおりたるめしたりし(三 詞書)

宮内庁書陵部所蔵本、吉水神社所蔵本、群書類従所収本は、書き入れと同じ「をりたる」、架蔵甲本は「おりたり」である。

藤原定家の仮名遣い实例に、高松宮本古今和歌集「をり(織)」「二例、「をれ」」「二例、高松宮本後撰和歌集「をる(織)」「二例、「をら(織)」「二例、「をり(織)」「五例、「をれ(織)」「一例、高松宮本拾遺和歌集「をる(織)」「一例、「をり(織)」「二例、「をれ(織)」「一例、御物本更級日記(定家自筆本)「をらせ(織)」「一例、「をりもの(織物)」「三例が見られるので、これも定家仮名遣いの写本を見て書き入れたと思われる。

三オ

○御しつらひ人／＼のすかたまで(三 詞書)

本文の「ら」に二点のミセケチがあり、「ら」の右横に書き入れの「ら」が見られる。確認の書き入れと思われる。

三ウ

○すきにしあるをりふみのやうに(四 詞書)

本文「を」に二点のミセケチがあり、「を」の右横に「お」の書き入れがある。無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本は、書き入れ通り「おり(折)である。

藤原定家の『下官集』に「おりふし」がある。さらに、定家の仮名遣い实例を見ると、高松宮本古今和歌集「於り(時)」「一例、高松宮本後撰和歌集「於り(時)」「四例、高松宮本拾遺和歌集「於り(時)」「三例、伊勢物語(天福二年本、定家筆)「於り(時)」「三例、御物本更級日記(定家自筆本)「於り(時)」「二例、「於りふし」」「一例、前田家本定頼集(定家自筆本)「於り(時)」「七例、近代秀歌(定家自筆本)「於り(時)」「一例がある。このことから書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

用例は、頭中将実宗が、いつも中宮の方へ参って、琵琶を弾き、歌を歌って遊んで、時々私に、「琴を弾きなさい」などといわれたのを、私は、「私などが弾いては、かえって興ざめでございます」とばかり申して過ごしていたがある時、手紙のような体裁の便りをよくこして」という記述の箇所である。

○あかぬしらつにねもかはさまし(五 歌)

「つ」「に」に一点ずつミセケチが見られ右横に「へに」の書き入れがある。

寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本では「折」となっている。意味の上では異同はない。

藤原定家の『下官集』に「おりふし」がある。さらに、定家の仮名遣い実例を見ると、高松宮本古今和歌集「於り(時)一〇例、高松宮本後撰和歌集「於り(時)四例、高松宮本拾遺和歌集「於り(時)三例、伊勢物語(天福二年本、定家筆)「於り(時)三例、御物本更級日記(定家自筆本)「於り(時)二一例、「於りふし」一例、前田家本定頼集(定家自筆本)「於り(時)七例、近代秀歌(定家自筆本)「於り(時)一例がある。このことから書き入れは、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

二才

○内裏にしりさふらはせをはしまし、かこの(三 詞書)

本文の「り」「を」に、二点のミセケチが見られる。

今山本の「しり」は、宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本では「しはし」となっている。

「内裏にしりさふらはせをはしまし、か」は「高倉天皇の御母である建春門院が、宮中にしばらく御滞在であったが」の意の箇所であり、今山本の「しり」では解釈できない。他の写本を見て書き入れたと思われる。

「をはしまし、か」の「を」に「お」の書き入れがある。宮内庁書陵部所蔵本、無窮会神習文庫所蔵本、彰考館所蔵本、寛永刊本、天理図書館所蔵本、架蔵甲本、群書類従所収本では「おはしまし、」となっている。吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本は「おはしまして」となっている。

藤原定家の仮名遣い実例に、高松宮本古今和歌集「於はしまさ」「於はしまし」九例、高松宮本拾遺和歌集「於はしまし」七例、伊勢物語(天福二年本、定家筆)「於はします」二例、「於はさ」一例、「於はし」一〇例、御物本更級日記(定家自筆本)「於はす(坐)一七例、前田家本定頼集(定家自筆本)「於はし」二二例、「於はす」一例、「於はせ」一例が見られるので、定家仮名遣い系統の写本を見て書き入れたと思われる。

二ウ

○いろくにおりたりし〇めしたりし(三 詞書)

本文の「お」に二点のミセケチがあり。「し」と「め」の間に、○があり、○の右横に書き入れ「を」が見られる。

「いろくにおりたりし〇めしたりし」は建春門院が、色々の模様に着たのを着ていらつしゃった」という意の箇所である。

宮内庁書陵部所蔵本は「をりたりし」で、今山本の書き入れと同じ。天理図書館所蔵本と群書類従所収本は「をりたりしを」、架蔵甲本は「おりたりしを」である。

藤原定家の仮名遣い実例に、高松宮本古今和歌集「をり(織)二例、「をれ」二例、高松宮本後撰和歌集「をる(織)二例、「をら(織)二例、「をり(織)五例、「をれ(織)一例、高松宮本拾遺和歌集「をる(織)一例、「をり(織)二例、「をれ(織)一例、御物本更級日記(定家自筆本)「をらせ(織)一例、「をりもの(織物)三例が見られるので、これも定家仮名遣いの写本を見て書き入れたと思われる。

「おりたりし〇」の「〇」を欠字と見て、今山本は「を」を書き入れている。天理図書館所蔵本、群書類従所収本は、「をりたりしを」となっているので、この系譜の写本をみて書き入れたと思われる。

今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』の書き入れ (一)

田 中 司 郎

はじめに

今山八幡宮所蔵本を平成元年六月から七月にかけての国文科研究の対象にふさわしいものとし、翻刻作業を行う過程で三百五十余りの書き入れ、夥しいミセケチ、検討を要する校合が出てきた。

これらをまとめて、解題の項目で『宮崎女子短期大学紀要』第十六号に掲載して各方面からのご教示をいただく予定だったが、他の写本とのつきあわせ、先行文献に目を通す時間が原稿締切日までになく、必要最小限の解題をつけて、『宮崎女子短期大学紀要』第十六号に翻刻した。

その後、今日まで、筆者は、四名で翻刻した今山八幡宮所蔵本『建礼門院右京大夫集』を、国文学演習の教材として使用してきた。

本稿は、この国文学演習の資料として作成したものである。未熟な考察が多々あると思われる。各方面からのご教示をお願いする。

なお、ミセケチ右横の仮名の書き入れは、筆者が、平成六年三月『国語国文薩摩路』第三十八号に投稿したものを、今回改稿した。

一 才

○た、あわれにも悲しくもなにとすれは (一 詞書)

書き入れとして墨筆による二点のミセケチが見られる。以下、ミ

セケチはすべて墨筆である。「ただ身にしてみても感じたり、悲しく思ったり何となく忘れにくく思うことある時々」の意の箇所であり、今山本の「なにとすれは」では前後の展開が円滑でないところから「なく」を書き入れたと思われる。

宮内庁書陵部所蔵本は「なにとなくも」、無窮会神習文庫所蔵本は「なにとすれとも」、天理図書館所蔵本は「なにともなく」、架蔵甲本は「なにもなく」となっているが、細川家本九州大学図書館所蔵本と、今山本の書き入れは一致する。

○おほゆること、ものあるをりふと (一 詞書)
書き入れの「そ」「の」「お」にそれぞれ二点のミセケチが見られる。

今山本の「ある」は、宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本、群書類従所収本では「その」となっている。宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本の場合、「おほゆること、ものあるをり」。「思うことがある時々」の意であり、群書類従所収本の場合、「おほゆること、もの、そのをりをり」で「思われるあれこれのこと、その時、その時」と解釈できる。読解上、今山本の系統が円滑である。今山本の「をり」は、宮内庁書陵部所蔵本、彰考館所蔵本、吉水神社所蔵本、内閣文庫所蔵本の場合、書き入れの通り「おり」であり、